





# 小説昭和十一年

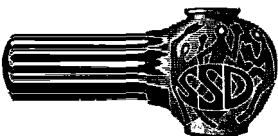
小沢信男

三省堂

沢 信 男（おざわ・のぶお）

昭和2年（1927年）東京に生まれる。昭和11年当時は、西銀座の泰明小学校3年生であった。日本大学芸術学部を卒業。現在、新日本文学会会員。著書に、短編集『わが忘れなば』（晶文社）『ドキュメント 犯罪の主役たち』（三一新書）がある。

現住所 東京都豊島区東池袋5～51～16



小説昭和十一年

SANSEIDO BOOKS 4

昭和44年12月15日 初版発行

定価 500 円

著 者◎ 小 沢 信 男  
発 行 者 株式会社 三 省 堂  
代表者 小 倉 正 風  
発 行 所 株式会社 三 省 堂  
東京都千代田区神田神保町1の1  
電話 東京 (293)3441(大代表)  
振 替 口座 東京 5 4 3 0 0

< B4 昭和十一年 >

0393-661004-2774

## 第一章

昭和十一年の二月の東京は、じつによく雪がふった。

四日の午後からふりだした雪は、夜にはいって吹雪となり、積雪三十センチをこえた。市内電車が運転を中止し、随所で停電し、電話も不通となった。木挽町の歌舞伎座の夜の部の客たちは帰宅の足をうばわれ、枱席に折りかさなつて仮眠した。

新聞によれば、明治十六年以来五十三年ぶりの大吹雪であつた。帝都大東京はために機能を麻痺し六百万の市民がいつせいに洗面をつくつた。ただし例外もあつて、ルンペン約二万人が臨時の除雪人夫にかりだされ、半日の労賃が一円ナリの、おもわぬ除雪インフレに微笑ほほえんだという。三日後の七日にも小雪がまい、八日にもまたふり、その半月後の二十三日には、未明から日中をふりこめて積雪三十五・五センチと記録された。

その三日後の二十六日未明から、またもや雪がちらつきだした。眠れる東京市民の太郎の屋根にも

次郎の屋根にもふりつもった。雪はしだいに本降りとなり、これは三十年ぶりの大雪であった。大東京はこの日ふたたび機能を麻痺した。

古屋健吉は水漬をすすった。ハやっぱり、郷里にかえろうかしら？

午前六時まえ、空は暗く、街路燈が、まいおりの雪を白くてらす。雪は頭のすぐうえからふいにふってくるようだ。一番電車は通ったが、眼路のとどくかぎりの白い路上に、起きて働いているのは虎屋自動車商会の古参助手の山本と、新米の助手の古屋健吉の二人きりのようだった。二人は、棒の先に厚い板きれを打ちつけた雪かき棒で、ガレージの前の舗道の雪をかきのける。雪のしたから歩道の四角い敷石がくろくろと現われる。そのうえにまたうっすらと雪がつもり、大きなキンツバをならべたようになる。

二人は大ヤカンをもちだし、吹きさらしのガレージに鼻づらをならべる三台の自動車のラジエターに湯をそそぎこむ。前からスターティング・ハンドルをさしこんでまわす。こうしてエンジンをあためて、すぐにも走りだせる用意をする。かがみこんでハンドルをまわす古屋健吉の詰襟の首筋にも雪はふる。古屋健吉は水漬をすすった。

ここは銀座の西のはずれ、土橋のたもとの電車道。虎屋自動車商会は、橋詰からかぞえて五軒目にある。木造トタン張りのガレージは、さいわい先日の大雪にもつぶれなかった。正面に車が三台、ぎりぎり肩をよせあう。そのうしろは、片側が事務所、片側の凹んだところにもう一台。その奥は四畳半と台所。それでゆきどまりだ。そのくせ二階には六畳間と八畳間と、物干台まである。頭でっか

ちの奇妙な不法建築である。四畳半には住みこみの運転手が二人、二階には店主の子供たちが赤ん坊までふくめて五人、まだぐっすりと眠っている。(四畳半の隅の無人の布団は、山本と古屋健吉のぬけがらである。)

この家で、いちばんの早起きは、店主の牧野虎三である。彼は眼がさめると、信じがたいほどの強固な意志力でガバと起きる。みずから火をおこし、湯をわかし、それから四畳半の二人の住みこみ助手をたたきおこす。雪の朝は、とくに張りきってたたきおこす。出歩きに不便な日ほど、自動車屋のかせぎ時だから。彼は雪かき棒を手に表にとびだし、エイッエイッとかけごえかけて雪をはねのけはじめる。こうなると二人の助手も、表に出ないわけにはいかない。すると彼は、雪かきは二人にまかせて家にはいり、女房殿をゆりおこす。妻はなかばうつつでハイと返事をするが、彼の一倍半はあるその体重は、なかなか万有引力にさからえない。牧野虎三は、チエツチエツと舌打ちする。妻はその舌打ちにおびえてやっと眼をさますのだ。

それから彼は顔を洗う。神棚の水をとりかえ、パンパンと柏手をうつ。神棚には、正面に天照皇大神宮、右脇に成田山新勝寺の護摩札、左脇に川崎大師の護摩札、その他もろもろの神札は、輪ゴムでとめてまつてある。その神棚の下に、牧野虎三自身の筆で「率先実行」「奮励努力」と書いた紙が貼つてある。細い楷書で、撥ねるべきところはちゃんと律義に撥ねている。小心で神経質な筆跡である。

彼はこの二つのスローガンによって、新聞配達夫から運転手になり、ハイヤー業者になりあがった。十年前に三人の運転手仲間と協同でこの店をひらいたとき、彼は数えの二十九歳だった。そのご五年

間に、仲間たちの車輛をつぎつぎに買収した。現在は、通いの運転手二人をくわえて、従業員六名の雇主である。しかし彼自身は、今日のささやかな地盤が、ひとえに二つのスローガンの実践の成果だという自信がない。開業以来の明けても暮れても不景氣時代は、努力した分だけ必ず報いられるというような、そんな甘いものではなかった。とはいえ、神棚の上のお札のおかげだというひたすらな確信もない。世間はなおさらそんな甘いものでない。そこで毎朝、神棚の上下をひとまとめにして柏手をうつ。

六名の従業員は、新参の十七歳の古屋健吉をのぞけば、みな二十代の若さで、小柄な雇主より背が高い。それかあらぬか、牧野虎三はちかごろ、鼻下に髭をたてた。けれども、彼らを見あげてもの言わねばならぬことにはかわりはない。唯一のみおろす存在の小柄な古屋健吉に、おのずから余計に注目し、余計にものをいう。あるいは往年のおのれの姿を、この新参助手のなかにみていたのかもしれないが、古屋健吉にとっては、これはやはり災難であった。

小柄な店主は、ひょいと表に顔を出した。ガレージの中の四台の車は、すでに四輪に泥よけも装置して、いつでも走りだせる態勢である。「やあ、ごくろう。入って火にあたれよ」

古屋健吉は、ほっとして、ずるずると水漬をすすりあげた。

「なんだ、ケンキチ」と小柄な店主が言った。「ハナぐらい、かんだらどうだ」  
健吉は、あわてて木綿の軍手をぬいでポケットをさぐる。

「こうやってかむんだ」牧野虎三は片肘を高くもちあげ、親指の腹で一方の小鼻をおさえ、ちいんと手漬をかんでみせた。漬物は勢いよく舗石に落下して、雪をまるくとかした。

「なあんだ」健吉はまげずに手漣をかんだ。大量の漣水がみごとに落下したが、あまった分が牛のよだれのように鼻翼からたれさがった。山本が笑い、店主が笑い、健吉も笑った。「東京でも、手漣をかんでいいんだなあ」

そのとき、パンクと破裂音が遠くでした。

「パンクですかね？」古参助手の山本が言う。「この雪んなかじゃ、難儀だぜ」

「ちがうね」店主が言った。

専門家の言だ。健吉の耳は傾聴の姿勢をとる。パンクでなければなんだろう。

店主はつまらなそうに言った。「けさは早くっから、なんだか音がしてるんだ」パンクでもない音に、関心のもちようもない、という口ぶりだった。このとき、ラインと事務所の電話が鳴った。

「それっ、口あけた。みんなをおこせ！」

健吉は四畳半へ、山本は運転席にとびのり、ガレージのなかから車を一台、表の車道へするとすべりださせた。

健吉は、ますます布団にもぐりこむ二人の運転手をさわぎたててやっどひきずりだす。そのときすでに戸外では、店主みずからハンドルにぎって、爆音たからかに本日の初稼ぎにスタートする。

こうして彼らの、いつもの一日がはじまった。

古屋健吉がこの店に住みこんで、ちょうど一と月になる。

上京の日、彼は雪の山道を草鞋わらじをはいて二時間かかって里さとにくだった。そこからバスで一時間ゆ



られ、中央本線の日下部駅くさかくについた。駅の待合室で、健吉は新しい足袋にはきかえ、そのうえから大きな編上靴をはいた。見送りの兄は、ここから草鞋をさげてもどってゆき、健吉はひとりで汽車に乗ったのだ。汽車はトンネルを長短四十いくつもくぐりぬけ、笹子トンネルをぬけ、しだいに平野に走りでる。彼は解放をおぼえた。あの山の中の段々島のちいさな自作農の四男坊の境遇を、追いだされたのも逃げだすでもない、かかとで蹴つとばしてきたんだ、と彼は思った。汽車はザマミロザマミロと音たてて走った。

健吉は前の年の春に高等小学校を卒業し、甲府の質屋に奉公にでた。そこに夏のおわりまでいて、家にもどった。もうこんりんざい甲府になんかゆくもんか、あんな町は質屋の夫婦ぐるみ地獄の火に焼かれるがいい、と思った。

秋の農繁期にかかるので、家でも帰ってきた健吉を重宝した。次男が麓の村に養子にゆき、三男が兵隊にとられ、ちようど人手がたりなかった。けれども健吉は、野良仕事にどうしても打ちこめなかった。一家のものはみな体が大きいのに、末っ子の彼だけが眼にみえて小さい。肥桶も、健吉がかつぐと引きずるようだ。満々とたたえた桶の底はきわめて地面に接近する。それをかついで段々島のがりおりは、とても性にあわなかつた。じつは次兄のように養子にでもゆかぬかぎり、山の中の作男でおわるだろう。その予測が彼の意欲を萎かえさせていた。健吉は、東京にゆきたいと思った。

百姓の子が百姓が嫌きらえてどうするだ、と家の者たちは言った。東京は生き馬の眼をぬくところだ、おめえみてえなほんくらは、また尻こだま抜かれるがオチずらよ……

だが、冬がちかづくくと、こんどは甲府の油屋から奉公の口がかかった。何年来の借金をしている藪

問屋の口ききだった。健吉さんみてえな小ちつらい男衆おとこは商売人がむいてるだよ。大きな腹のめだつあによろ嫂あによが言った。両親と長兄が、そうだそうだ、と考え深げにうなずいた。馬小屋の馬までうなずいた。油ぐれえ、ここにいっても売れるさよ、と健吉は悪態をついた。どうせ冬籠りのあいだは、覚悟をすえてごろごろしているよりないのだから。

その冬ごもりのあいだの、馬の飼葉かひばを貯えねばならない。部落から半里ほどの上の窪平くぼんぺいという草地まで、健吉は、長兄と馬の尻について草刈りにゆく。朝飯前の仕事だった。自分の体がすっぽり入る風呂桶ほどの大きな竹籠かごに、山盛りに草をつめこんだ。それを背負ってほせい岨道せみちをよたよたくだる。籠かごにみじかい脚がはえて動いてゆくあんばいだ。途中、ふいに背籠かごをうしろにひっぱられた。崖の中腹からつきでた木の根株ねぐらが、運わるく背籠かごの眼まなこにつきささったのだ。立往たつり主ぬししていると、うしろからきた馬が背籠かごの草を悠長ゆうじやうにたべだす気配だ。そのまたうしろから、なにしてるだあ、と長兄の声。健吉は、重い背籠かごを思いきり邪険じやけんに木の根株ねぐらからふりもぎった。と、遠心力のついた背籠かごは健吉ごとさまえよく宙空ちゆうくうにとびだした。脚下きゃくさは十数メートル下の午旁ごぼう島しままで急角度の傾斜面けいせつめん。そこをもんどり打って落下した。健吉の視界を、天地が数回もんどり打った。それからふいに静止する。健吉は籠かごから見捨てられ、斜面の瘦せたつつじの木株きぐらにひっかかっていた。どこにも怪我はなかった。茫然として斜面をみあげ、みおろした。籠かごは下の畠はたけに安着し、せっかくの刈り草が上から下まで帯になつて散乱している。華麗なる徒勞。

上の岨道で長兄が血相かえて呼んでいる。「でえいよぶかあ」  
健吉は、がっくり肘をついて思った、へやっぱり東京へゆこう……▽

健吉は麓の村の次兄のもとへゆき、上京の希望をのべた。世話しておくんなっしょ。

その反響が、正月のなかばすぎてかえってきた。次兄の養家の遠縁にあたる人物が、東京の銀座で自動車屋をしていて、助手に使用してやるから来るならすぐにかいとのこと。健吉は躊躇しなかつた。

ちょうど嫂の出産で、家の中はとりこんでいた。あしたはお七夜で赤飯をたくから、それをくつてオッ走る（出かける）がいいだ、というのを、ふりきつて出立した。赤飯ぐれえ、なあに毎日でもくえる身分になってみせるだ……そのためにもここで意地をはるのが、きつと将来のいい封になる。健吉はそう思った。

こうして彼は虎屋自動車商会の助手となり、三度に一度はさめきらぬごはんにありつく身分になったのだ。

ケンキチもそろそろ東京の水に慣れたらう、と先輩運転手たちは言う。ハイと答えるが、どうしてこれが慣れにくい。

助手の仕事の第一が車の清掃。店主の牧野虎三は、うちはハイヤーだからと口やかましく言う。流しの円タクとは、料金だつて格段にちがう。汽車でいうなら一等と三等のひらきがある。仕事をおえて帰庫した車は、その都度ほこりを払い、タイヤを洗い、座席のマットの砂もはたいて、つぎの仕事に送りだす。客席には膝掛け毛布、足を温める行火あんかの炭火も、ほどよい火加減で入れねばならぬ。晴れた日はまだしも、雪がふるとタイヤは四輪とも泥にまみれ、泥のはねはフロント・グラスにまでかかってくる。ホースをのびして水洗いして、濡れたボディはセーム皮でふきとらねばならぬ。座席のゴム・マットの泥も棒タワシをつかつて洗いおとすのだ。

健吉は、上京以来いちどだけ銀座通りをぶらついた。浅草の観音さまにいった。泉岳寺にはまだい  
かない。東京がどれほど広いか見当もつかないが、ともかく東京の道路は舗装されていて、例の特大  
の編上靴で歩くと頭にひびいてかなわない。どこにも土がない。そのくせ雪の日の車は、田んぼの中  
を泳いできたのかと思えるほどの泥まみれで帰ってくる。舗装道路も泥道となる。東京はどうやら、  
雪がふると広大無辺な村落となるらしかった。

東京は雪がすくない、ふつてもすぐとけると聞いていたが、健吉が上京した翌朝、眼をさますと雪  
だった。雪かきが初仕事だった。東京の雪はとけるまもなく無二無三にどけるのだということに気が  
ついた。おまけにけっこうよくふる。その日はとりわけ忙しく、とりわけ水を使う。郷里の清水の手  
の切れるつめたさはないのだが、それでもゴム長靴の中で五本の指ともなくなった感じになる。じじ  
つは霜焼けで倍の太さにふくらんでいる。夜更けにやっと四畳半の隅の布団にもぐりこみ、もういち  
ど便所に立って、それからガタンと音がするほどねむりこみ、そのうち足の指のかゆさに眼をさま  
す。ねむさとかゆさの相剋である。

東京の水道はつめたい、へんにつめたい。これが健吉の上京一カ月間の集約的な感想だった。

この朝、健吉はあたたかい飯にありつけた。

みそ汁とお新香と佃煮で三杯目をたべていると、表で、帰庫した合図の警笛が鳴る。健吉はみそ汁  
をぶっかけてかきこみ、事務所におりた。

運転手の柴田が「すげえすげえ」と言いながら、背中をまるめて事務所にかけこんできた。

「お堀っ端ぼたで、兵隊がおおぜい演習してますぞ。でっかい機関銃なんか据えちゃってさあ」

彼は客を飯田町の駅まで送り、半蔵門を通ってもどつてくると、三宅坂のところを着剣した兵士たちにとストップをくった。帰り車くるまだと言うと、さっさとゆけとうしろのバンパーをけとばされた。一目散に逃げてきたが、桜田門界限まで雪の中を兵隊の出盛りである。「バンパーへこんでたら兵隊さんの責任ですよ。お国が弁償すべきだね。おれのせいじゃないからね」

店主の牧野虎三は、舌打ちして事務所をでた。健吉もあとについた。バンパーは異常なかった。健吉は水洗いにかかる。店主はおちついて事務所にもどり、壁の東京市内地図にむかって、柴田の報告する通行止めの箇所をチェックしました。

そのとき表の電車道を、着剣した兵士たちをのせた軍用トラックが、二台つづけて走り去った。

二・二六事件は、こうして彼らの耳目にとどいた。

この二十六日未明の午前五時、青山の歩兵第一連隊と第三連隊の一部の皇道派青年将校たちは、約千四百名の部下の兵士を率いて、かねて狙いの重臣数名を襲撃してこれを殺傷、同時に首相官邸、陸軍省、参謀本部、警視庁、内務省など、霞ヶ関一帯を占拠した。

この段階において、近代日本史上最大といわれるクーデターは成功した。武器を占有する者が、しめしあわせて起ちあがれば、スタートにおいて成功するのは当然である。しかしこのあとの彼らの計画は、計画というより空想だった。「いわゆる元老重臣軍閥官僚政党等は国体破壊の元凶なり」これらを断乎打倒すれば、上御一人の大御心すなわち現人神の絶対正義は発揚して、国家改造の昭和維新

は顕現する。かくて積年の貧窮の底に呻吟する民草は、一君万民のユートピアのもとに暮らしは安堵し、われら皇軍は後顧のうれいなく満州の野にいでて勇戦するであらう……

ところがこのとき、君側の奸どもをもぎとられた上御一人は、宮城の中で立腹していた。不逞の逆徒をすみやかに鎮定せよ、と命令していた。これが大御心のなかみだった。すなわち皇道派青年將校たちの空想は、空想というより妄想だった。

しかもこの大御心は、軍首脳部の日和見的なおもわくによって棚上げされた。將軍や幕僚たちは、口々に大御心の奉戴をよばわりつつ、それぞれのおもわくを奉戴して右往左往した。

この日、ラジオは沈黙し、号外の鈴は夜になるまで鳴らなかった。

虎屋自動車商会の事務所に、事件の噂をまっさきにもたらしたのは、裏通りの金融業者を銀行までこんなだ堀運転手だった。彼は車を表の通りに停めたまま、四角い肩をゆすって事務所に向けこみ「大臣がみんな殺されたそうです」と言った。

そこへ、通いの川口運転手がのっそりと出勤してきた。「遅くなりまして」と丁寧な朝の挨拶をして、それから途方もないことを言った。「宮城が占領されたというのは、ほんとうでしようか」

彼は独身のくせに顎鬚はやして分別くさい口をきく。店主の牧野虎三はこの鬚をきらって剃れというが、これは虫よけですと答えて一向に剃らない。烏森の小唄の師匠の家の二階に下宿している。師匠のところへは、政友会の院外団の太った旦那がちょいちょいくる。この旦那の線から、けさ早くも情報が入って、出勤しようとした川口運転手は、師匠にとりすがられた。そこで雪のなかを虎の門・

溜池界限までぶらぶら視察してきたが、辻々に着剣の兵隊がガラガラと立っている。川口運転手はそう語った。

してみると、けさがた聞いた物音はまさしく事件のそれであり、柴田運転手が遭遇したのは、その人殺しの軍隊である。彼はそのなかを突っつけてきたことになる。柴田運転手はにわかに興奮した。

「よおし、おれもいってこよう」と堀運転手が言った。

「おれも乗せてってくれえ」と山本助手が叫んだ。

「よせよせ」と牧野虎三店主が顔をしかめた。

「そうだ、ぶっ殺されたら、つまらねえぞ」と柴田運転手が店主に同調した。体験の稀少価値をまもらねばならぬ。

この日、数寄屋橋のたもとの小学校は午前中に授業をうちきった。店主の子供たちの上の二人の小學生は、帰宅して弁当をたべた。

軍用トラックが走ってきて、土橋の上に着剣の兵士たちを一分隊ほどおろした。兵士たちは橋の上で軽便ストローブをたき、交代であたたまりながら、そのくせ外套も着ずに立哨した。外套を着た将校が一人付添っていた。となりの新幸橋しんこうばしのたもとに政友会本部がある。そのための警備らしかった。

けれども、人殺し軍隊の屯ろする霞ヶ関方面にさえ近づかなければ、世の中はべつになんということもないようだった。虎屋自動車商会は、店主の期待通り、午前も午後も順調に稼ぎつづけた。電話のベルはこころよく鳴った。もう一人の通いの佐々木運転手が休暇日なので、店主みずから再三稼ぎに出た。運転手たちはでかけては噂をばらまき、また新しい見聞を仕入れてきた。

それにひきかえ、虎屋自動車商会のとなりの松竹理髪店は、ばったり客足がとだえた。赤白青のあめん棒が、雪空にむなしくクルクルまわった。

松竹理髪店のあるじは、話し相手に欠乏した。彼は傘をさして土橋の上にゆき、外套をきた将校に話しかけた。今朝来耳こんちようみみにしたいくつかのニュースについて、真疑如何と問いかけた。将校は、橋げたに肘をかけて退屈そうにもたれながら「そう言いますね」と「そんなことはないでしょう」の二通りで応答した。どうやら事件の輪郭を、おぼろにつかんだ松竹理髪店は、将校の労をねぎらいつつ、こんな物騒なことはまことにこまる、じつにこまります、と市民を代表して抗議した。将校は、いや市民のみなさんにご迷惑はかけません、安心して業務にはげんでください、とこれまた軍を代表するかのごとき答弁をした。後年、日本全土いやアジア各域にまで君臨した帝国軍人どものファシストぶりにくらべれば、まだこの当時の将校は、すくなくもこの橋の上の将校は、市民にたいしては市民的であった。

松竹理髪店は、満足してひきあげ、その会談の成果を、虎屋自動車商会の事務所にきて吹聴した。そして、じつにまったくひでえことをしやがる、と口をきわめて軍人をののしりだした。

「ねえ虎屋さん」と松竹理髪店は言った。「これはもう、古今未曾有の国難ですぞ。世の終わりかもしれないぜ」

「だって、松竹さん」虎屋店主の牧野虎三は、ここで笑って反論した。「安心して業務にはげめと、兵隊さんが言ったんでしょ」

「ちえっ、のんきだねえ。軍人のいうことなんか、あてになるもんか」松竹理髪店は傘のさきでト



ンと床をついて立ちあがった。「一国の首相が殺されたというのに、虎屋さん、あんまりほいほいかせいでると、そのうちバチがあたるぜえ」

悲観論者は捨てぜりふのこして立ちさった。楽観論者は、フンと鼻をならした。それからやにわに不安な表情になった。彼はそそくさと二階に上がり、太った妻に、郵便貯金帳と印鑑をしっかりと帯の間にはさんでおくように命令した。ついでに仏壇にちょっと手をあわせた。

夕方、休みのはずの佐々木運転手があらわれた。くるなり「いやあ、おどろいた」と言った。「東京は戦争中なんだってねえ」

佐々木運転手はこの店の最古参である。若白髪のせいで老けてみえる。去年世帯をもち日本橋小伝馬町の小さな衣料小物問屋の二階に下宿した。階下のあるじと同郷のよしみだった。せっかくの休日を雪にとざされ、日がな一日新妻とこたつにあたり、これもまんざらわるくなかったが、そのうち、階下の電話が鳴った。郷里の福井からの長距離電話で、東京はいま市街戦のさなかと聞くが、安否如何、というのである。小物問屋は、きもをつぶして階段をかけあがってきた。雪の物干台にあがって四方をうちながめたが、戦雲たなびく気配もない。そんなわけで、ともかく店にでできたという。事件のニュースは、膝元をとびこえて、はるか地方にこそすみやかに疾駆しているらしかった。

そこへ、山本助手の同乗した堀運転手の車がもどってきた。明治座まで芸者の客をはこんだのである。水洗いをしながら、山本は、古屋健吉に小声で得意げに言った。「日比谷公園にいてみる。陸戦隊が陣地つくってるぞ。これはおまえ、陸軍と海軍のたたかいだぞ」